

書 評 会

坂口ふみ著

『〈個〉の誕生——キリスト教教理をつくった人びと』

(1996 年)

司 会

聖心女子大学 岩田 靖 夫

(1998 年度の中世哲学会大会は、坂口ふみ先生著『〈個〉の誕生——キリスト教教理をつくった人びと』を書評会のテーマにとりあげました。以下はその討議の概要です。

質疑応答の概要

---

加藤信朗氏 (東京都立大学名誉教授)

この書物は、一人の日本人女性がヨーロッパ全体を全身で駆け抜けた、記念碑的な業績です。それは、教義論争という、専門家でも後込みする数知らずの中に分け入り、これを解りやすく解明した、文化的世界地図と言ってもよいでしょう。著者自身も言うように、この書物は物語として書かれています。その内容は「ヨーロッパ」そして「キリスト教」という重い現実です。「中世から近代へかけての時代が抜けている」という山村敬氏や宮内璋氏の御指摘にもかかわらず、四世紀から六世紀が、中世世界の、従ってまた、ヨーロッパの原点であったことは、確実です。

宮内璋氏 (南山大学名誉教授)

博識に圧倒されました。私のキリスト教はノミナリズムですが坂口さんの方がよほどほんとのキリスト教徒のように思えました。そうでもないでせうか。質問はいずれ又の折に致し度。東方のキリスト教の展開がわからないと、例えばドストエフスキーの思想はよく理解出来ないとされます。そのような連関で、この書物に続く先程お話しの二冊の書物は是非書いていただき度い。

谷隆一郎氏（九州大学教授）

この書物は、必ずしもキリスト教の特殊な閉ざされたドグマを語るものではなくて、ギリシア哲学とキリスト教との格闘のドラマを書いていると思います。それは、「人間とはなにか」という普遍的な探究に関わるはずでず。

私が質問したい一つの問題点は、いわばキリスト教が成立する以前の、使徒たちの経験に戻って問い直したとき、ヒュポスタシスとはどういうことか、という点です。ある意味で使徒たちはすでに全き人間であったのではなく、イエスに出会って真に人間すなわち、神の現成するかたちに成ったというべきでしょう。つまり、ヒュポスタシスによって人間は成立するのであり、この出会いの経験をその根拠から語る事が重要だと思います。「人であることの根底に、神が現成してくるとすれば、そうした真に人間であることの根拠を、使徒的経験（修道的文脈）の中に見出してゆく、ということではないでしょうか。

坂口氏（清泉女子大学教授）

谷先生のおっしゃることは、私がさきに2人称から1人称への移行に複雑な問題があるだろうと申したことの御指摘だと思います。

修道的文脈というのは、私のような不信者にはむづかしいことですが、この頃のヒュポスタシス—ペルソナがキリストの内に使徒たちが見た「あなた」にはかならないことは仰せの通りと思います。この神的な「あなた」の深淵は、純粋に動的な存在性のようなものですが、それにあえて（スコラ的に）名をつけたことは、志向と思索に手がかりを与えるという点でやはり大きな意味があったように私は思います。ただ、名をつけることによって、固化し、干からびる可能性はあり、中世の思想家たちはその危険をよく意識しながら思索を展開していったように思います。

片山寛氏（西南女学院大学教授）

この書物はいろいろな問題を投げかけました。その中から、ここで、一つだけ質問したい点は、223頁に書かれている「キリストはメタファーである」という文章の意味です。その意味を理論的に展開していただきたい。

坂口氏

（この質問に対しては、坂口先生は当日の答弁は舌足らずな点があったと言われ、以下のように補足されました。）

メタファーの問題について、あまり整理して考えたことはありませんが、私は理論というものは、感覚的なものからのメタファーを使わずにはありえず、イメージは理論を導くものだと思っています。自然科学や哲学はもとより、論理学でも数学でもそうだと思います。「有限」「無限」「超越」「分有」「包摂」「集合」「群」などみなそうです。デカルトに反して、私は抽象的なものはいつとも密蝋の香りを残していると思います。

メタファーをどのレベルで考えるか——言語か、表象か、感情か、あるいは知的認識のあり方としてか——しかも、それらのどのような関わりあいとして考えるか、この問題については、多くの考え方があられるでしょう。私は、ただ、パシュラールやリククールや他の人々が指摘するように、人が世界や存在をとらえるとき、感覚や想像力にうったえるイメージが概念的思考への強い起動力になり、かつ、既存の概念の枠を広げたり、変化・移動させる働きをもつと思うのです。そういう意味で、思考をよびおこし、まとめ、方向づけ、変革もさせるもの、と理解しております。新しい強力な中心的イメージの出現は、新しい思考世界を開くと思います。

キリスト教に例をとれば、キリスト者が神、世界、人間、歴史、文化を考えるとき、思考への刺激の放射点であり、それを中心で支えるものが、キリスト・イエスであったと思います。イエスという人間の生涯、死、語りを「神として」見ることが開く認識の世界は、たとえば、ボナヴェントゥラなどが示したように、絢爛たるものでした。それは、ヨーロッパの世界認識・人間認識のあらゆるところに今なおその痕跡を残していると思います。

中世でなされてきた、この神人イメージの読みの修練は、自己のうちにも、他者のうちにも、自然や言語や行為のうちにも、無限へ通じる道を示してきたと思います。メタファー性というものは、キリスト像においてはまだ、理論的分化（言述かイメージか、意味か経験か、観念か感覚か、存在か心理か、等々）以前にあって、包括的に働く姿を示していると思います。

熊田陽一郎氏（中央大学名誉教授）

この書物は、男とか女とかドイツ人とか日本人というような、偶有性を出発点にして、具体的なところから人間を考えている。その点に感動しました。なぜ、私は抽象的なことしか考えられなかったのか、と自問しています。

質問は74頁のアリウスに関する説明についてです。アリウスの三位一体論は明解で合理的だが、なぜ異端なのか。なにが欠けているのか。坂口氏は、「神ではなく、神になるべき本性を持っていない、現にあるがままの人間への強烈な愛と救いへの関心の欠如」と言われる。アリウス派は、合理的であるとしても、こういう関心をもっていないのでしょうか。新プラトン主義が、現にあるがままの人間の救いへの関心を薄れさせているのでしょうか。

坂口氏

アリウス派は、受肉する第二の位格を全き神とは考えません。それに対し、正統は受肉して全く人であるものを、全き神でもあると考えます。これは逆理です。この逆理の解釈もいろいろありうるでしょうが、その一つの、私が考えるところでは重要な、解釈は、あるがままの弱い人間がそのまま神の器だというもの。これは、やはり西方キリスト教の一つの特徴だと思われまふ。この観点はアリウス派からは出てこない。少なくとも、その線は弱いでしょう。

清水哲郎氏（東北大学教授）

細かい点では異論があるが、全体としては説得力があります。

私も、熊田氏と同じ疑問を抱きました。私は、パウロはアリウス主義者だ、と思っています。私の質問は、論理学で「suppositio personalis（代置）」と言われているものは、多分、「hypostasis-persona」から来ているのではないか、という点です。この論理学の用語は個別のものを指しながら普遍を指しているのです。

三位一体論のヒュポスタシスが、関係性、交流性、個別性であることには、まったく同感です。その上で、フュシスの問題の登場によって、ヒュポスタシスがどのように豊かになったのか、二性論によって、どこが論理的に豊かになっているのか、をお訊ねしたい。

坂口氏

キリスト論は三位一体論の続きです。三位一体論では、ウシアとヒュポスタシスとの関係はまだはっきりしていません。キリスト論でその関係がはっきりしてくる。両者はどうしても切り離さなければならない。しかし、三位一体論の段階では、この切斷は論理的にはあるはずでしたが、まだ十分に意識されていませんでした。

桑原直己氏（三重大学助教授）

「ヒュポスタシス—ペルソナ」は矛盾を含んでいて、これが人間に対するカテゴリー的理解を砕いてゆく。ギリシアの普遍主義に突破口を開ける。私は本書をこのように理解しました。では、イエスの話がなぜ普遍性の衣をまといねばならないのか。13世紀のトマスがなぜアリストテレス主義を無視できないのか。ギリシアの普遍主義がなぜ概念の枯渇を呼び起こすのか。われわれが普遍主義の誘惑に捉えられるのは、なぜでしょうか。

坂口氏

ギリシアの普遍主義の強力は素晴らしいものです。それは、政治的な場面ではローマの統一を成就してゆきます。人間と人間とを結びつけるものに、「愛」と「論理」があるとすれば、それは論理の力です。しかし、論理は止まると、固まってしまう。だから、常に壊し続けなければなりません。論理は、一度始めたら、どこまでも続けねばならない、という宿命の下にあるのです。

山村 敬氏（元富山大学教授）

（あらかじめ質問状を寄せられた山村敬氏は、当日会場におられたのですが、司会者はそれに気づかず、御質問の趣旨を発言する機会を逸せられました。そこで、後日、手紙で再度質問の要点をいただき、坂口先生がそれへの答弁を記されました。）

四一六世紀に限らず、八・九世紀までを含めた全体を、それ自身位格の性格をもつ、一つの不可分な思想体験とみる見方から一言。教父思想展開の動機は、ギリシア思想から異端の形で次々に提起される疑義に、キリスト教の真実から答えていくことにあります。自己主張を貫くのはギリシア思想です。これは、教父思想の基本中の基本で、公会議を要とするその営みによって、ギリシア思想は、その位格（個）性を露にするに至るまで、キリスト教の真実によって貫かれるのです。ここに、思想、文化の位格性ということが考えられてくるのです。

坂口氏

山村先生が、理論化の推進者はギリシア思想であり、ギリシア思想が「キリスト教の真実に貫かれて位格性を露にするに至る」と言われるのは、教理論争の中でギリシア的論理と概念が、神と個を語るために変貌させられてゆくプロセスを言っておられるのかと存じ、全く同意見でございます。